

令和5年度第1回青森市健康福祉審議会地域保健専門分科会 会議概要

日 時：令和5年12月26日（火） 18時30分～19時45分

場 所：青森市保健所（元気プラザ）2階 健康教室

出席委員：高谷和彦委員、成田憲雄委員、吉田智委員、近井宏樹委員、蝦名宏美委員
《計5名》

案件（1） 近藤文俊臨時委員、山谷詠子臨時委員、柏谷公子臨時委員
《計3名》

案件（2） 藤林正雄臨時委員、福原智子臨時委員、森越利夫臨時委員
《計3名》

欠席委員：北畠滋郎委員

事務局：保健部長 千葉康伸 青森市保健所長 野村由美子

保健部次長兼青森市保健所副所長 榊乃里子

保健部次長 加福拓志

浪岡振興部健康福祉課長 新宅雅之

案件（1）

健康づくり推進課長 種市靖子

健康づくり推進課健康寿命対策室長 樋口量美

健康づくり推進課主幹 小豆畑世津子 健康づくり推進課主幹 平井泉

健康づくり推進課主査 正木由里子 健康づくり推進課主事 小堀修嗣

健康づくり推進課主事 今佑馬 健康づくり推進課保健師 大宮雄樹

案件（2）

保健予防課長 福士秀徳

保健予防課主幹 笹原まい子

保健予防課主事 工藤真弓

保健予防課主事 須藤泰史

保健予防課主事 佐藤康樹

案件（3）

感染症対策課長 中村晶子

感染症対策課主幹 葛西歩

感染症対策課主幹 伊藤亮

会議次第

- 1 開会
- 2 案件
 - （1）青森市健康寿命延伸計画（第2次）の策定について
 - （2）青森市自殺対策行動計画（第2期計画）の策定について
 - （3）（仮称）青森市感染症予防計画の策定について
- 3 その他
- 4 閉会

議事要旨

案件（1）青森市健康寿命延伸計画（第2次）の策定について

事務局（健康づくり推進課長）から資料1、資料2に沿って説明

意見・質疑応答

主な意見は以下のとおり

- （委員） 新型コロナウイルス感染症の拡大が指標の達成に大きな影響を及ぼしていると分かった。今後、新型コロナやその他の感染症が流行をするかもしれないという意識を持って計画を立てていくことが必要となる。
- ◇（事務局） 国でも、次の新興感染症による生活習慣の変化などを踏まえた健康づくり施策を考えていくべきとしていることから、本市においても委員の御意見を踏まえた検討をしてみたい。

- （委員） 最終評価を見ると男性が頑張っている印象を受ける。性別・年齢によって健康意識を高めるためのアプローチの仕方を変えて、全体のレベル向上を目指してはどうか。
- ◇（事務局） 本市の最終評価では、女性の喫煙率が高いこと、20歳～64歳の日常生活歩数が少ないなど、性別・年齢による健康課題が明らかとなっていることから、それらを踏まえた検討をしてみたい。

- （委員） 「参考資料1 各指標の評価状況」において第1章の健康づくりサポーター数（累計）、健康づくりリーダー数（累計）、健康講座等健康教育層参加者数の参加者の年齢層はどのようになっているのか。若い方、働き盛りの若い方を取り込んでいかないと将来につながらない気がするが、どう考えているのか。
- ◇（事務局） 年齢層を集計すると、健康づくりサポーターは70歳代、80歳代、健康づくりリーダーは70歳代、60歳代、健康講座等健康教育層参加者数は65歳～74歳が最も多いという現状がある。
しかし、現計画から職域の若い健康づくりリーダーを育成しており、また、あおもり健康づくり実践企業の認定も行っていることから、働き盛り世代の若い方への会社での健康教育も増加している。
若い世代からの健康教養（ヘルスリテラシー）の向上には働き掛けが重要であると認識していることから、ライフコースアプローチを踏まえた検討をしていく。

- （委員） アンケート調査対象者を20歳から80歳までとした理由はなにか。
- ◇（事務局） 国民健康・栄養調査や県民健康・栄養調査における生活習慣調査の対象年齢が20歳以上であることや、男性の平均寿命79.9歳、女性の平均寿命86.2歳であること等、総合的に判断して20歳から80歳とした。

- （委員） 細かい内容の設問があるように感じているが、それらに対するフォローをする予定があるのか、若しくは、回答できない場合はそのまま未回答として扱うのか。
- ◇（事務局） 一部設問においては今後の施策に取り込めるよう詳しく聞く内容となっている。
個別のフォローは行わず、未回答であったとしても、実態の把握として取り扱いたい。

- （委員） どのくらいの回収率を目指しているのか。
- ◇（事務局） 現計画策定時の回収率は約4割であったことから、今回も同等の回収率を目指している。

- （委員） アンケートの回答の催促はするのか。
また、表紙に書いてある『お問い合わせ先』の記載を大きくし、分かりやすい表示のほうがいいのではないか。
- ◇（事務局） 催促は行わないものの、前回と異なり、Google フォームを用いてスマートフォンなどからの回答も可能とするなど工夫した。
『お問い合わせ先』については枠を付けたり、文字を大きくしたりするなどして、アンケートを実施していきたい。

案件 青森市自殺対策行動計画（第2期計画）について

事務局（保健予防課長）から資料1、資料2、資料3に沿って説明。

意見・質疑応答

主な意見は以下のとおり

- （委員） 青森市自殺対策行動計画としては内容には問題なく、また進捗状況もおおむね良いと思う。
ただ、先日、八戸市民病院で精神科を閉めるとの報道があったが、青森市でも、自殺企図や希死念慮などを認めた患者さんを早急に精神科担当の先生に紹介、診療をお願いすることはかなり難しくなっている。精神科医師の確保、早急に診察に結び付けられるような体制を構築していく必要があると思う。
- ◇（事務局） 医療の面で自殺対策を担う精神科医師は、本計画の推進にとって重要であり、自殺企図や希死念慮を抱き、早急に精神科医療を必要とする方が医療を受けられるよう、精神科病院の地域医療連携室等とも連携してまいる。
また、精神科医師の確保については、本県高校出身の弘前大学医学部入学生に対し、修学資金を貸与する「医師修学資金支援事業」について、県とともに本市も経費負担をしているところであり、今後も引き続き県及び弘前大学との連携を密にし、医学生及び若手医師への支援を実施するなど、精神科医師を含む医師の確保及び魅力ある地域を目指し、県内への定着に向けて取り組んでまいる。
- （委員） 第1期計画を踏襲しつつ発展させることや子ども若者対策を強化し、居場所づくり等も加えること。また、SOSの出し方教育に加え、SOSの受け方研修を教職員・保護者に行うこと。女性に対する支援については、特にシングルマザー等へのサポートを強化、貧困対策と連携強化し、生活問題に対応すること。自殺未遂者への支援としては、医療機関のみならず、消防署、警察署との連携を強化することや、高齢者、特に70代、80代以上への孤立・孤独対策を強化すること。
また、相談方法として電話だけでなく、メールやSNSを活用し、広い年代からの相談対応を考えること。加えて、庁内連携を構築すること。
- ◇（事務局） 御意見の内容や国の自殺総合対策大綱に盛り込まれている内容を踏まえ第2期計画の内容にどのように反映していくかについて、第2回専門分科会以降、具体的に検討してまいりたい。
- （委員） 高齢者の自殺に危機感を持っている。70歳以上の高齢者の割合が高くなっているため、70歳代や80歳代に焦点を絞った形の自殺対策が必要になってくる。
また、特に若者の自殺も焦点になっている。子どものSOSの出し方に関しては、ずっと継続されてテーマになっているが、子どもがSOSを出しても、大人が誰も受け取ってくれないと、今度は出さなくなってしまう。そのた

めに、しっかり受け止めるための教育や研修等をやっていかなければいけない。

- （委員） 特定健康診査、特定保健指導は、メタボリックシンドローム対策であり、自殺対策とすることに違和感がある。産業保健の分野では、むしろ治療と仕事の両立支援の方が必要である。
- ◇（事務局） 働く世代の自殺者が多いことや生活習慣病により様々な心と身体のバランスの不調等をきたす可能性もあり、早期にメンタルヘルスケアの支援できるように取組むという観点から、特定健康診査の受診率と特定保健指導の実施率を評価指標にしてきたが、第2期計画の評価指標等につきましては、御意見等を踏まえ、第2回専門分科会以降、検討してまいりたい。

案件（3）（仮称）青森市感染症予防計画の策定について

事務局（感染症対策課長）から資料1、資料2、資料3に沿って説明

意見・質疑応答

主な意見は以下のとおり

- （委員） 新型コロナ対応において、青森市の課題や強みのようなものがあると思うが、それを基礎として計画を策定するべきであり、その基礎がないと、こちらも意見を出すのが難しい。
- ◇（事務局） 青森市保健所の課題として、本来の業務の3分の1を新型コロナ業務とすべきであったが、ほとんどを新型コロナ業務に注力せざるを得なかったことから、平時から職員への感染症発生時のトレーニングをしておくことが大切であった。
また、クリニックや医療機関の協力が不可欠であり、市民への正しい情報提供も重要であった。
- （委員） 青森市保健所として今後のどのようにしていくべきか。
- ◇（事務局） 事業計画を立てながら、感染症に関して日頃から訓練をしておくことが重要である。
また、保健所職員のみならず、保健所業務を支援する外部の専門職のIHEAT要員に対しても研修等を行い始めたところである。
- （委員） 鳥インフルエンザ対応でもそうだが、日頃からの訓練が重要である。